

## 改革・開放期にみるウイグル・アイデンティティの再構築について

——トルグン・アルマス『ウイグル人』を中心に——

田 中 周

新疆ウイグル自治区内のマジョリティーはウイグル族で人口約900万、それに続くのが漢族で約800万人存在し、しばしばこのウイグル族と漢族との間の衝突が注目されている。中国政府の区域自治政策の下で文化的な自治権を付与されているウイグル人だが、文革期には彼らの民族文化が徹底的に破壊されるという状況にあった。文革終了後、改革・開放期に入ってから政策のゆり戻しがあり、政府主導の下で少数民族文化の復興が行われるようになる。この民族政策の緩和に伴い、新疆への漢族の大量流入、漢語化が進む状況に、民族的アイデンティティ喪失の危機感を強く持つウイグル人知識人たちが中心となって、自らの歴史を再確認し、民族文化を創出するという動きが高まるようになる。

そこで本報告では、改革・開放期に見られる文化復興現象が、ウイグル人たちのいかなる意識に基づいて進められたのかをふまえ、報告者が当時の状況を語る上で欠かせない存在と考える、トルグン・アルマスという人物によって書かれ、1989年に出版された歴史書『ウイグル人 *Uyghurlar*』<sup>(1)</sup>の分析を試みた。本書は、ウイグル人が中央アジアを舞台とする8000年の栄光の歴史を有すると主張したものである。しかし出版後すぐに発禁となり、「民族分裂主義」との関連で大規模な批判討論会とキャンペーンが開かれた。これは同年生じたウルムチ事件や、翌年のバリン郷事件といった現地ムスリムによる大衆抗議運動に危機感を募らせた当局の対応であり、事件や本書に対する徹底的な取り締まりは、政府に好ましくない活動に強権で対応する次の時代を予感させる出来事となった。

結論を先に述べると、この歴史書『ウイグル人』は改革・開放期までには見られなかった新たなウイグル・アイデンティティの構築に寄与する力、ウイグル人の連帯感を強固にする力をそのナラティブの内に持っている、というのが報告者の主張である。この考えが妥当性を持つ事を検証するために以下の手順によって報告を進めた。

まず、社会における歴史的記憶の役割を、諸概念の整理を行いながら、新疆の例を離れて

<sup>(1)</sup>Turghun Almas. 1989. *Uyghurlar*, Shinjang Yashlar-Ösmitler Neshriyati, Ürümchi.

一般的に説明した。トルグンは「歴史」を描いたが、ここではエスニック・アイデンティティあるいはナショナル・アイデンティティのような集合的アイデンティティは、過去の記憶や歴史を共有することで構築される事を確認した。

次にウイグル・ナショナリズムに対して過敏な反応をとる体制側の論理について考えた。建国後、中国共産党は排外（反帝）ナショナリズムと強権体制で多民族の統合を推進してきた。しかし80年代以降になると、統合の原理であった社会主義イデオロギーやモラルが色褪せたことで求心力の低下と権力の正当性の変容が生じ、中国はアイデンティティの危機に陥っている<sup>(2)</sup>。これが国家の統合を阻むとされる活動に徹底的な弾圧が加えられる原因だが、このような状況下で登場したのが費孝通の「中華民族多元一体構造論」である<sup>(3)</sup>。彼の議論は、「中華民族」が数千年の歴史を経て、諸民族の接触、混合、融合の複雑なプロセスを通じて形成されたとするものだが、現在では主要民族たる漢民族を中心とした公定の歴史的记忆によって、各民族の凝集力を高めるために使用されている。例えば前述の『ウイグル人』に対する批判キャンペーンが開かれた時も、体制側の歴史家たちにより、「トルグンは中国が古来より統一多民族国家であるという事実や中原の漢族との経済・文化の相互影響を無視し、ウイグル族の歴史を独立史として描いている。」という主張がなされている<sup>(4)</sup>。

次にトルグン・アルマスの経歴から彼の人となりを描くと同時に、改革・開放期以降に新疆で生じた、文学、歴史、宗教、音楽といった様々な分野でのウイグル文化復興の状況を追った<sup>(5)</sup>。運動は自民族の歴史的记忆を構築することで、民族アイデンティティを保持しようとする試みが主要な部分を占めていた。背景には、活動の中心を担ったウイグル人知識人たちの漢化の波に対する焦りと恐れが存在したが、トルグン・アルマスもこの認識を共有し、歴史を描くことでウイグル人意識の強化を目指したと考えられる。

最後に以上の前提に立ち、『ウイグル人』のナラティブ分析を行った。本書の概要は四部29章、841ページからなり、紀元前6000年頃から14世紀初頭までのウイグル人の歴史が記述されている。またウイグル人の故郷は中央アジア（東は大興安嶺山脈から西はカスピ海まで、北はアルタイ山脈から南はヒマラヤ山脈に広がる地域）で、その中心部が新疆、七河

<sup>(2)</sup> 詳しくは、毛里和子「中華世界のアイデンティティの変容と再創造」『現代中国の構造変動7』東京大学出版会、2001年を参照。

<sup>(3)</sup> 費孝通の中華民族論については、毛里和子『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版会、1998年、76-79頁を参照。

<sup>(4)</sup> 討論会の内容は、馮大新主編『《維吾爾人》等三本書問題討論會論文集』新疆人民出版社、1992年を参照。

<sup>(5)</sup> この一連の民族文化運動と知識人たちの「声」に関しては、新免康「中華人民共和国期における新疆への漢族の移住とウイグル人の文化」『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社、2003年を参照。

地域、ウズベキスタン、キルギスタンだと定義される。叙述の核となるのは、ウイグル人の祖先が打ち立てた11の独立王朝（総称して「大オグズ帝国」）の歴史であり、漢族が打ち立てた中華諸王朝（総称して「中国（Junggo）」）との競合・敵対関係によって歴史が語られていく。オグズ伝説や狼始祖伝説といった神話を共有することで成立する「大オグズ帝国」だが、「敵」として描かれる「中国」とは領域の面でも決して交わることは無い。

本書は歴史書の体裁をとるため、現在と未来が直接語られる事は無いが、著者の現状に対する認識、未来へのメッセージを受け取ることは可能である。まず過去については、ウイグル人が有していた文化の先進性や軍事力の優越性が徹底して強調される。そして「中国」側に与した歴史人物を反逆者と描く一方で、「中国」に抵抗した人物を英雄とし、民族が規範とすべき存在を提示している。さらに18世紀中葉まで中国は中央アジアで影響力を持たなかったことが言及されており、これは裏を返すと現在は敵である「中国」の支配下に甘んじているとの現状認識が伺える。またその後迎える「大オグズ帝国」の衰退に関しても、「中国」の策略にその原因が求められ、栄光の過去を持つウイグル人の共同体は「中国」という外部要因によって凋落の一途を辿り、結合性が失われたとの主張が読み取れる。これはナショナリストが一般的に大衆を政治動員するために用いるレトリックに通じる。そこでは衰退の原因を取り除く闘争を通じて、共同体が本来持つ調和的な本質を未来において回復し、過去の栄光を取り戻す必要性が語られる。過去・現在・未来が対比される事で大衆の心に緊張状態が生じ、加えて集会的闘争に参加する動機や運動が進むべきベクトルが示される事により、ナショナリストのナラティブは人々の心を惹きつけるのである<sup>6)</sup>。

以上見てきたように、『ウイグル人』は体制側の主張する歴史を真っ向から否定した。トルグンは、それまでナショナル・ヒストリーの枠内で語られてきたウイグル史を民族意識の拠り所とせざるを得なかった状況下で、ウイグル人の為に歴史を描き、アイデンティティの「再構築」を試みたと考える。

（早稲田大学大学院政治学研究所博士課程）

---

<sup>6)</sup> このナショナリストが用いる過去・現在・未来からなる三層構造のレトリックについては、Matthew Levinger, Paula Franklin Lytle. 2001. 'Myth and mobilisation: the triadic structure of nationalist rhetoric', *Nations and Nationalism*, 7(2). を参照。